活動報告

初等教育科短期海外（ニュージーランド）研修
― 語学研修，チャイルドケアセンター体験を通して ―

大　田　亜　紀

Short-Term Study Abroad in New Zealand for Students in Junior college:
Through Language Training and Volunteer in Childcare Centre

Aki OHTA

【要　　旨】

本稿では，短期大学部初等教育科において，2019年度ニュージーランド，オークランド市で実施した短期海外研修の実際と本研修からの成果及び課題について報告する。また，初等教育科の学生の外国の文化や生活及び海外研修に対する意識調査の結果を基に，本学科学生の次回以降の短期大学部の海外研修の方向性について考える。

【キーワード】

海外研修，語学研修，ティファリキ，異文化理解

1．はじめに

日本は，少子高齢化がどんどん進んできているが，一方で国際化が急激に進む中，外国にルーツを持つ乳幼児の数は増加し続けている。保育，教育の現場においても，外国籍の園児・児童の在籍は珍しいことではなくなっている。また，小学校においては，2011年度の学習指導要領改訂において，小学校外国語活動が導入され，2020年度の新学習指導要領全面実施に伴い，中学年での外国語科活動，高学年での教科として外国語科が新設され，小学校教員には，外国語の指導力，英語力も求められることとなった。

本学初等教育科の学生は，卒業後の進路として保育・教職関連への就職する場合が多い。多くの学生は，園児，児童の保育・教育者として指導的な立場となり，外国籍の園児・児童との日常的な関わりや外国語の指導にあたることになる。

2018年度より始まった短期大学部初等教育科短期海外研修は，「語学研修・ホームステイを通して外国人の園児・児童や保護者に対応するために必要な英会話力を習得すると同時に，実際に海外の幼稚園・保育施設で園児と接することにより，外国人の児童の保育の方法を学ぶ」ことをねらいとしている。

第１回目の2018年度は，参加学生８名であったが，第２回目となった今回は，３名の参加と

なった。募集については，「進路指導Ⅰ」等の授業や募集ポスターの掲示，短期海外研修説明会の実施を行ったが，興味はもちつつも実際の参加決定までは難しい学生が多かった。

また，今回の海外研修実施（２月）直前の12月の中国武漢での新型コロナウィルス感染症発生により，渡航先であるニュージーランドでの研修実施について，直前まで催行の可否も含め審議を進めてきた。渡航の安全性，現地での生活，研修受け入れ状況等を現地スタッフと連日やりとりをしながら，ニュージーランドにおける感染者数無の状況，研修及びホームステイ受け入れ先の滞在の快諾，また参加学生及び保護者の参加希望意思の確認を経て，第２回目の催行決定となった。

２．海外研修の日程及び内容

２週間の短期海外研修の日程は，図１に示す通りである。研修前半に語学研修，後半にチャイルドケアセンターでのボランティア体験を実施した。

日程	コース・研修先	宿泊地
2/29(土)	福岡空港―羽田空港―オークランド	機中泊
3/1(日)	オークランド着―オークランド観光	ホームステイ
3/2(月)	語学学校において語学研修	ホームステイ
3/3(火)	語学学校において語学研修	ホームステイ
3/4(水)	語学学校において語学研修	ホームステイ
3/5(木)	語学学校において語学研修	ホームステイ
3/6(金)	語学学校において語学研修	ホームステイ
3/7(土)	自由研修：ホストファミリーと文化交流	ホームステイ
3/8(日)	自由研修：ホストファミリーと文化交流	ホームステイ
3/9(月)	Child-care Centreボランティア体験	ホームステイ
3/10(火)	Child-care Centreボランティア体験	ホームステイ
3/11(水)	Child-care Centreボランティア体験	ホームステイ
3/12(木)	Child-care Centreボランティア体験	ホームステイ
3/13(金)	Child-care Centreボランティア体験	ホームステイ
3/14(土)	自由研修	ホームステイ
3/15(日)	オークランド―成田空港―福岡空港	博多泊
3/16(月)	博多―別府、大分	

図１　海外研修の日程

３．海外研修の実際

⑴　語学研修

ニュージーランド，オークランド市にあるAspring Language Institute語学学校において，５日間の語学研修を実施した。語学学校には，中国，ブラジル，その他世界各国から受講者がおり，クラスごとに受講者の英語力レベルに応じたレッスンが行われていた。初日は，レベル分けテストが実施された。参加学生はそれぞれ異なるレベルのクラスに設定された。レベルによっては，難しい長文読解等の内容が多く，４日間という限られた受講でもあるため，できるだけ日常的なテーマ設定（日常会話での汎用性のある内容）がされている授業クラスでの受講を希望し，受け入れてもらった。写真１は授業の様子である。当然，All Englishでの授業であるが，講師の先生が分かりやすく理解しやすい英語を使用されていた為，学生たちは大変意欲的に参加しており，他国の受講者とも進んで英語を使って意思疎通していた。

また，午前中の授業後，午後からは希望者のみ１時間のextra lessonを受講可能であった。ここでは，全レベルの受講者が混ざって行われるため，内容的には少し難しい面もあったが，１名の学生は毎回参加をした。

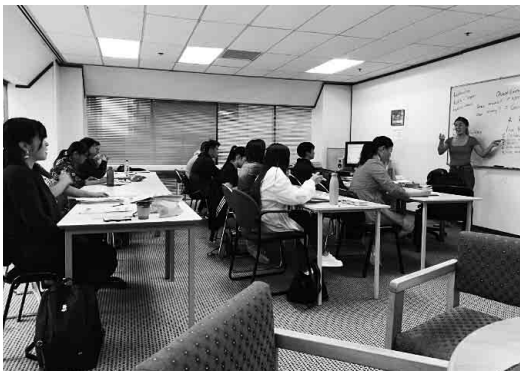

写真１　Aspring Language Instituteでの授業

⑵　チャイルドケアセンターボランティア体験

今回の研修にあたり，３名の学生は別々のセンターでの受け入れ許可を事前に頂いていた。ところが，ニュージーランド訪問の４日目に，チャイルドケアセンターの保護者より，アジアから訪問する体験学生についての懸念の声があり，３施設の内，２施設より受入れのお断りの連絡が入った。訪問前からの健康状態の確認，滞在してからの健康チェックも日々継続してい

たが，ニュージーランド国内でも感染に関する報道は繰り返されていたこともあり，保護者の不安の声が施設へあがったものと考えられる。このことについては，現地スタッフが早急に対応をして頂き，受け入れを許諾してくれる１施設に２名の学生を配置し，無事に体験をすることができた。

１）幼児教育カリキュラム「ティファリキ」

ニュージーランドでは，1996年に導入された独自の幼児教育カリキュラム「ティファリキ」を基にして，オリジナルの教育方針に基づいた幼児教育が行われている。保育のカリキュラムの多くが「学校教育の準備としての成果」を求められ，その為に就学前施設は何を用意するのかという内容で構成されるのとは対照的に，ティファリキは，保育の実践者，研究者，マオリ族の意見を集めて作られた，子どもの「今ここにある生活」を重視する哺育感に依拠するカリキュラムである（七木田ら，2015）。

今回，ボランティア体験をさせて頂くチャイルドケアセンターも，ティファリキに基づいた保育が行われている。０～５歳までを預かるチャイルドケアセンターは，日本では私立保育園に該当する。施設の面積で，園児の数が決まっており，５～６人の園児に対して１名の先生が配置されている。行事やイベントも少なく，ゆったりとした保育が行われている。

２）チャイルドケアセンターでの体験

子どもの興味・関心を大事に，個性を伸ばすこと，できることを伸ばすことを中心に据えているため，すべての子どもが同じ活動を行っていないことにどう対応したらよいか，学生たちは，大変戸惑っている様子もみられた。何がしたいのか，どう思っているのか，なぜ泣いているのか等，言葉の壁もあり，子ども達の思いを理解することに苦しみながらも，自ら積極的に関わったり，また先生達へ尋ねたりしながら「ティファリキ」を体感していたようである（写真２，３，４）。

写真２　チャイルドケアセンター体験（学生 A）

写真３　チャイルドケアセンター体験（学生 B）

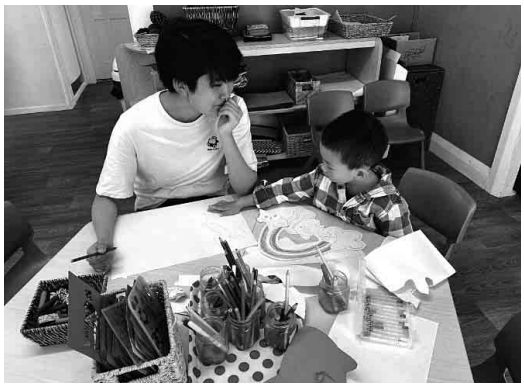

写真４　チャイルドケアセンター体験（学生 C）

⑶　ホームステイおよびニュージーランド生活

３名の参加者それぞれ異なるホストファミリー宅にて，ニュージーランド生活を体験した。どのホストファミリーも，学生を大変歓迎してくれ，異国の地での生活に不安を感じることなく異文化交流をすることができていた（写真５）。

今回の訪問時が，新型コロナウィルス感染症の拡大が少しずつ広がりつつある状況でもあったため，本学の学生の受け入れ以降はすべての受け入れが中止になる予定であるとのことであった。今回の訪問にあたり，ニュージーランドに入国後はマスクはしないようにすすめられていたため，学生はマスクをしないままニュージーランド生活を過ごした。これは，語学学校でもチャイルドケアセンター体験でも同様である。逆にマスクをしていたほうが目立ち，そのことによる学生に対する不快な体験を防ぐためであると現地スタッフは話されていた。実際，市内のどの観光地に訪れても差別的な体験を受けることは全くなかった。

写真５　Host mother と学生

週末は，自由時間であり，ホストファミリーと出かけたり，自由に市内観光などをしたりして過ごしている。

少人数での研修でもあったため，引率者も含め４人で市内観光をすることも多く，オークランド博物館ではマオリ族のハカを観たり，オークランド市内で羊をみることのできる丘まで，遠路バスを乗り継ぎ歩いて行ったり，ニュージーランドの歴史や文化を思う存分味わっている（写真６）。

日を追うごとに，現地の人へ自分から英語で話しかける等，積極性が増し，言語の壁に対する不安も徐々に薄れていた。

写真６　Auckland 市内散策

４．成果と課題

⑴　参加者の留学後の振り返り

今回の短期海外研修を終えて，３名の学生に短期海外研修に関するアンケート調査を実施した。

１)「ニュージーランド研修実施後，あなたの行動や意識に以下の点で変化はありましたか」という質問については，３名ともが以下の質問項目に対して肯定的な回答であった。

・多様な価値観や文化的背景を受容できるようになった。
・外交・国際関係への興味が高まった。
・リスクを恐れず挑戦する意識が高まった。
・自分のキャリアについて考えが深まった。
・日本人としての意識が高まった。

また，質問に対してあまり肯定的でなかった項目は，以下の２項目であった。

・学習（学び）に積極的に取り組むようになった。
・自己肯定感（自信）が高まった。

２）「現在（就職先で，進学して），ニュージーランド研修での体験が生かされていること」は何かについて，以下のように回答している。

・やりたいこと、挑戦してみたいことが出来た。
・自分の思いを言葉で伝えられない環境の中で、言語化が難しい子ども達の気持ちを理解する事ができた。
・外国人への理解はもちろん、様々な価値観の受容ができるようになり、考えが柔軟になった気がする。

３）「ニュージーランド研修で，自分にとってとても良かったこと」について，以下のように回答している。

・バスの中などで困っていた時、バスの運転手も他の方々もとても親切にして下さり、どんな場所でも温かく受容し助けてくださったことで、受容された時の喜びと安堵を得ました。異文化が集まる国だからこそ、日本人にはない、違って当たり前という考え方の中で生きる人々に感銘を受けました。
・他の皆と違う私はおかしい、ではなく、皆の考えと私の考えが合わないだけ、と考えることが出来るようになった。
・外国語を積極的に使うと、正しい英語でなくても相手とコミュニケーションを取ることができることがわかったことです。

※下線部筆者

ニュージーランドでの生活体験が，学生の今後の生き方にもプラスの影響を与えることができていたと考えられる。日常慣れ親しんで，気付かなかったことも，異文化の中での生活を通して，固定化されていた価値観を崩すことができたり，自他を受け入れる広い心のもちかたを学んだりすることができていた。母語が通じない不自由な生活の中で，もっている言語を駆使し，さらに非言語をくわえながら，コミュニケーションができることを実際の体験で知り，伝えたい思いが大切であり，正しさだけにとらわれすぎると伝え合うことが困難であることに気付いている。自分の英語が通じる，意思疎通できる，分かり合えた経験は，次のコミュニケーションへの動機づけになっていた。

４）本海外研修手配旅行会社（株）アサヒトラベル山口氏と参加学生との研修後の対談内容を以下に示す。

表１　2019年度実績及び課題

研修全体	・学内で研修催行の周知が十分に行き届いていなかった。 ・追加募集まで研修の存在自体を認知していない学生がいた。周りの学生も研修の存在を知らなかった方が多かった。 ・募集開始の時期が秋からだったため，まとまった研修費用を研修までに学生が用意する時間が足りない。学生が費用捻出することも考慮に入れると，募集告知のタイミングは夏以前から考えれば，費用の準備ができて参加する学生も増える。 ・今回の研修費用については価格相応の充実した良い経験ができた。少なくとも今回参加した学生の周りの学生でもコスト面の心配なく研修に参加できる学生は多くいる。
語学学校	・レベル分けテスト後の英語クラスが実際の学生レベルにあっていなかった。テストは記述のみ，クラスは会話がメインという中で実際のレベルとの齟齬が生まれていた。記述はできるが会話が不得意な学生はテストで高いレベルのクラスに入ったものの，授業についていけていなかった。
チャイルドケアセンター	・センター内での実技研修はスムーズにできて，いい経験になったが，実際に日本とどういう部分が違い，ティファリキの要素を含んだ教育とは何なのかなど一歩踏み込んだ質問をセンタースタッフにできる英語力がなく，深い部分の学習ができなかった。
	・ニュージーランド渡航後，すぐに実習期間に入らずに良かった。渡航後１週間の語学学校があった事で英語・街に慣れる良い準備期間になった。その過程があってスムーズに実習期間に入ることができた。

※（株）アサヒトラベル　山口氏作成

募集開始が遅かったことに合わせて，学生への周知が十分でなかったことが参加学生の意見から明確になった。周知の方法について，今後さらに検討が必要である。

チャイルドケアセンター体験前に１週間の語学研修があったことは，英語での生活に慣れる準備期間として適切であったようである。しかし，前述したが，レベル分けテスト後のクラス別レッスンの内容については，学びたい内容と異なることが課題であり，事前にレッスン内容を知っておくことで対応がスムーズにできたのではないかと思われる。本学独自の語学研修プログラムではなく，語学学校のカリキュラムの一部に，途中から入ることも順応するのに時間を要したと言える。５日間しかない貴重な語学研修であるためカリキュラム内容の事前確認が必要であった。

また，ティファリキについては，概要理解までは事前にできていたが，実際の保育現場でさらに詳しく知りたいことについては，専門的な英語力も必要となり，質問やそれに対する回答について十分な理解ができなかったことが課題として残っている。これについては，学生から質問したいこと等をメールや電話で収集し，現地スタッフを通して回答を得ることで，より理解を深めることもできるのではないかと考える。

⑵　初等教育科学生の短期海外研修に対する意識調査

短期大学部初等教育科の１年生を対象とし，英語の学習や海外研修に関するアンケートを実施し，志向性について調査した。

対象：１年生182名
内容：①外国の文化や生活，海外への渡航
海外研修への興味・関心に関する質問（３項目）について５段階で評定
②海外留学参加検討する際に重視することを10項目について４段階で評定

①－１「海外の国々の文化や生活等に興味がありますか？」

「とてもある」「ある」と回答した学生が，全体の67％（122名）を占めており，「あまりない」「ない」と回答した学生は，全体の13％（24名）であった（図２）。外国の文化や生活への興味・関心をもっている学生は，そうでない学生より有意に多かった。(p＝0.0000** p＜.01)

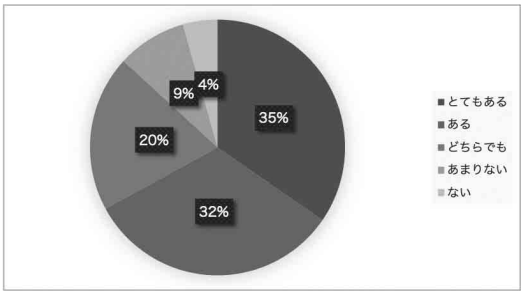

図２　海外の国々の文化や生活等への興味

①－２「機会があれば海外へ行ってみたいですか？」

「行ってみたい」「やや行ってみたい」と回答した学生が，全体の78％（142名），「行きたくない」「あまり行きたくない」と回答した学生は，全体の13％（23名）であった（図３）。海外へ行ってみたいとう思いをもっている学生は，そうでない学生より有意に多い結果であった。(p＝0.0000** p＜.01)

産学官によるグローバル人財育成のための戦略では，日本の若者の「内向き志向」が問題視されており，海外への興味や関心の低さ，留学に対する積極的な姿勢が見られないこと等が示されている。本学科の学生への意識調査からは，海外への興味や関心は決して低くないことがわかる。

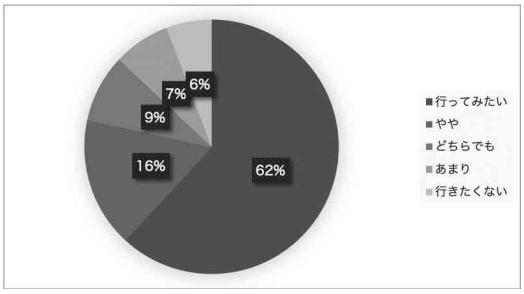

図３　海外渡航に関する意識

①－３「別府大学短期大学部では「短期海外研修」を行っていますが，あなたは，「海外研修」に興味・関心はありますか？」

短期海外研修に関する興味・関心についての質問については，「とてもある」「ある」と回答した学生は全体の38％（69名），「あまりない」

「ない」と回答した学生は，全体の34％（62名）であった（図４）。海外研修に対する本学科の学生の意識について有意差はみられなかった。（p＝0.6003 ns .10＜p）

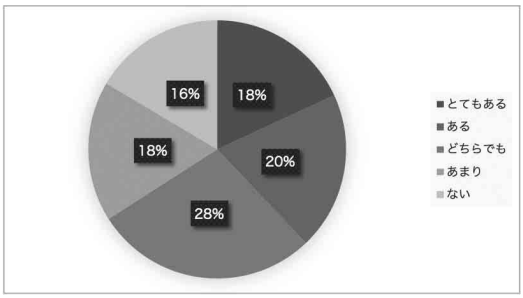

図４　海外研修に関する意識

①－２，①－３の結果から，「海外に対する興味・関心」については，肯定的な学生が多いが，興味・関心の高さが，そのまま「海外研修」への興味・関心の高さにつながってはいない。海外研修の目的や内容に関する説明が十分にない状況においてアンケート調査を行った為，学生の意識を適切に収集できなかったのではないかと考える。研修の意義や内容について体験者の報告を基にしながら、十分に広報できる場をつくっていく必要がある。

②　「あなたが海外留学に参加するかしないかを検討する場合，以下の項目はどれだけ重要視しますか？」

本質問では，海外留学に自分が参加を検討する際，重視することについて，各10項目について４段階（４：とても重要である，３：重要である，２：あまり重要でない，１：全く重要でない）で回答をさせた。10項目は，①行き先，②日程や時期，③研修内容，④留学事前研修の充実，⑤留学中の支援等（現地スタッフ，旅行会社等），⑥自分の語学力，⑦留学費用，⑧滞在先の治安，⑨ホームステイの有無，⑩同行するメンバーである。結果を図５に示す。

海外研修の参加検討を行う際，重要視することの割合が高かった項目は，⑦留学費用，⑧滞在先の治安であった。現在，世界的に新型コロナウィルス感染症の拡大による不安な状況が続

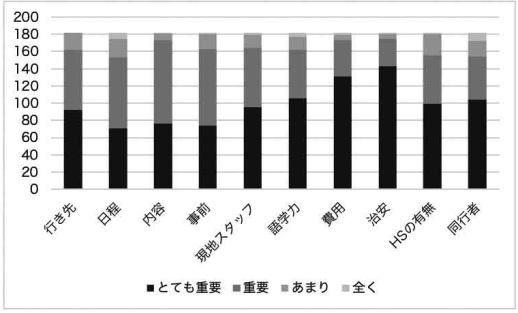

図５　海外研修検討において重要視すること

いていることもあり，治安も含め滞在先についても，安心安全に研修が実施できるかが，より重であると捉えていることがわかる。また，海外研修参加を検討する際に，海外研修に係る経費については，日程や内容以上に重要視している結果であった。2019年度の海外研参加者が大変少なかった理由の一つにも考えられる。今後は、現在世界中で拡大しているコロナウイルス感染症による渡航制限等も考えながら従来の海外研修のスタイルとは異なる新たな方法を創り出すことが求められている。

５．おわりに

未来の保育者，教育者の養成機関として，グローバルな視野をもち，高いコミュニケーション能力を有する人材育成は今後さらに求められる。単なる英語力の向上のみを求めるのではなく，異文化間交流の体験を通して，国際感覚豊かな人材の育成のための豊かな学びの場となる海外研修の在り方をさらに検討していきたい。

参考文献

１）全国大学生活協同組合連合会，「2014　大学生の意識調査」概要報告，2015.4
https://www.univcoop.or.jp/press/mind/report-mind2014.html
２）七木田敦，ジュディス・ダンカン，「子育て先進国」ニュージーランドの保育：歴史と文化が紡ぐ家族支援と幼児教育」，福村出版，2015.4